

新聞経営の先達者：

ウォルター家と『ザ・タイムズ』（上）

鈴木雄雅

1. ジョン・ウォルター 1 世
2. ジョン・ウォルター 2 世
結 び
(以上 今号掲載)
3. ジョン・ウォルター 3 世
4. ウォルター一族の手を離れたタイムズ
結 び
(以上 次号掲載予定)

1. ジョン・ウォルター 1 世 (John Walter I)
1738～1812 (在職期間1784～1795)

ジョン・ウォルター 1 世は、ロンドンで石炭商の息子として生まれたが、父の死後、早くからシティで石炭商を継いでいた。同時に、ロイズ保険のアンダーライター（後述）もやり、傍らチャリングクロスで出版印刷の仕事も手がけていた。



そのウォルターが、現在の『ザ・タイムズ』を1785年1月1日、ロンドンのブラックヤードフライヤーズのプリンティング・ハウスヤード（現在のプリンティングハウス・スクエア）のささやかな印刷工場を本拠として、『ザ・デイリー・ユニバーサル・レジスター (*The Daily Universal Register*)』の題字の下に創刊した。その3年後の1788年1月1日から、『ザ・タイムズ、ザ・デイリー・ユニバーサル・レジスター (*The Times or The Daily Universal*

Register)』(以下、タイムズ)という名前に変え、その年3月18日からは、さらに短く『ザ・タイムズ』(*The Times*)と改名し、経営者が変わっても今日なお続く題号となった。この時の変更の理由は題字が長かったのでデリリーとユニバーサルの字を略して、レジスターと呼ばれていたが、それでもなおアニュアル・レジスター (*The Annual Register*)¹などの年鑑と誤解されやすかったため、単音節で簡単明瞭な「タイムズ」という名にしたのである²。

ウォルターは新聞事業については何も知らない素人であった。従って、ザ・タイムズ発行の意図も何もニュース伝達の意気に駆られたからではない。ただ、そのきっかけには次のような事実が関与していた。1780年、彼が保険の取引をした船がジャマイカでハリケーンに会い、借金を負うはめになり、妻と6人の子供を抱え、住んでいた家を手放さなくてはならなくなるという事態に陥った。

その時、偶然にも興味を持ったのが、ロゴグラフィー (logography) (後述) という新しい印刷機であった。経済的必要性と、この印刷機との出会いによって、後年イギリスを代表する新聞『ザ・タイムズ』(以下タイムズとする) が生まれたのである。

ロゴグラフィー印刷機

ウォルターの時代の印刷機は、1440年のグーテンベルグ (Johannes Gutenberg 1394?~1468) が発明したものと大差はなかった。それまでというのは、アルファベットを一字ずつ植字していたため、商売の手段としては、速さに欠けており、幾度も改良が試みられていたのである。

この改良に、ロンドンの植字工ヘンリー・ジョンソン (Henry Johnson) が1783年に成功した。これが通常用語や数字を一本の活字とし、タイプをセットし印刷するロゴグラフィーである。

ウォルターは、先見の目があったのか友人や弁護士力を借りて、その特許権を買った。またその頃ブラックフライヤーズの国王直轄の印刷所の使用権も買い取ったのである。はじめは、日刊新聞の発行は計画せず、自分の商

¹ イギリスなどヨーロッパの社会、経済情勢、科学、宗教、法律、スポーツなど多岐にわたる項目を示した年鑑。1758年創刊。現在も発行されている。

² 上野精一『上野精一文集』(朝日新聞社、1972年)、p.60

売用のパンフレットや図書の印刷、くじの数字印刷などに利用していた。ところが、このロゴグラフィーに目をつけた友人が新聞発行を勧め、時代の要請を察知したウォルターは発行の準備を始めるのである。

そして1785年、前述のように『タイムズ』という名で創刊したのである。しかし、印刷枚数が特に増えるわけではなく、若干の手間が省けただけで、予期した通りの植字上の能率を上げられなかった。その結果、経済上の利益も上げることが出来ず、ロゴグラフィーは失敗に終わった。

しかしながら、ウォルターは社会が、時代が、新聞に何を要求し、期待しているかを知っていた。そしてこの感覚と認識の上に加えて、決行する決断力と創造する創意をもっていた。さらに18世紀の終わりは近代ジャーナリズムの芽生えの時期でもあった。

18世紀末のイギリス文化

この時代の社会生活の主たる中心はコーヒーハウスであった。今日のように、様々な情報が数多くの媒体を通して、我々に伝わる時代とは異なり、限られた場所でしかニュースや情報を得ることは出来なかった。中でも情報手段に事欠く中層階級の市民は独自のチャンネルを作り始めた。その場所がコーヒーハウスであり、そのメディアが新聞だったのである。コーヒーハウスが、情報交換の場所という性格のものであったので、新聞や雑誌は必ず備えつけられ、新聞記者にとってもニュースを嗅ぎ出し、ゴシップを拾う格好の取材の場となっていた。

コーヒーハウスを支えた中層階級市民の勃興は、文字の読める階層を拡大させた。そしてコーヒーハウスの顧客たちの、海運ニュース、内外の政治情報の渴望が、知的関心とあいまって、日刊紙などの、定期刊行物の成長を不可避にさせたのである。

そのひとつがロイズ・コーヒーハウスである。この店は、経済活動と情報交換そしてコーヒーハウスの三者を結ぶ役割を果たしていた。ロイズ(Lloyds)は今日も、世界中の保険が何らかの形で必ず結びつくと言われるが、そもそも17世紀末のイギリスにできた小さなコーヒーハウスから始まった。このロイズ・コーヒーハウスは、商取引の場と新聞や広告などから、情報を得ると同時に、そうしたジャーナリズムに情報をもたらす場としての機能を兼備していた。

この時代の保険制度は、現在のように、特別の会社が存在するのではなく、金融業者や貿易商人が個人で保険を引き受けていた。こうした保険業者はアンダーライターと呼ばれたが、アンダーライターは個人で保険を引き受けるから、当然リスクも大きい。それゆえに、何よりも正確な情報こそが重要であった。

かくいうウォルターもロイズのアンダーライターの一人であり、保険の取引に失敗したこともあったから、誰より情報の大切さを身をもって経験し、知っていたに違いない。そして、コーヒーハウスを核として、17世紀末から急速に活字文化が広がり、商業紙が生まれ、1760年代には郵便馬車の発達による全国的な配達網も確立した。

また17世紀中葉までのイギリス人の識字率はおよそ3分の1に達していたのが、18世紀後半になると、識字率はさらに上昇して、男子では50%を超えた。こうして文盲と半文盲が混ざりあった民衆の世界に、活字文化が少しずつ浸透していったのである³。

ウォルターの『タイムズ』とイギリス新聞界

この時代の朝刊紙の形態は、おおよそ幅42.5インチ、縦18.75インチの全紙を二つ折りにし、4ページ建てを作っていた。内容は議会の概要、外国ニュース、情報をはじめ、イギリスの司法界、実業界のゴシップ、社会に生起する諸問題を扱った雑録、新しい劇の批評や詩の紹介、投書が扱われていた。また朝刊紙のほかに、週3回程度発行される新聞などが10紙あり、日曜新聞も既に顔を見せていた。そのほかの定期刊行物も発行され、18世紀の言論界は、しだいに活気をおびてきた。

その中でウォルターが他紙と違いをつけるために工夫を凝らしたのは、まず定価を下げたことである。当時他紙が1部3ペンスであったのに対し、半ペンス安くし、2.5ペンスとしたのである。また当時の新聞紙が議会討論の記事を載せ、印刷に手間取り、朝刊の発行が遅れがちで、商人や一般業界人に不便をきたしていたところに目をつけた。そこでウォルターはこのならわしを正し、討論記事は大要を載せ、早朝6時に発行できることを約束して実行したのである。そして広告はページを増やしても翌朝必ず載せるように工

³ 川北稔『「非労働時間」の生活史』（リポート、1987）、p.89

夫した。特に、力を入れたのは、ヨーロッパ大陸からのニュース速報であった。

外国ニュース

フランス革命（1789～99）の頃から、特に外国の情報が必要となってきた。外国の情報は、普通外国の雑誌からの輸入が多かった。また当時の郵便局というのは、単なる郵便配達の役割を果たすだけでなく、ニュースレターを職員が勝手に翻訳、要約し、今で言う通信社の役割も果たしていた。そのために、新聞社などは、年に100ギニー郵便局に払い、その内容を分けてもらうという有様だった⁴。

外国ニュースのニーズを知ったウォルターはさっそくこの点に目をつけ、1792年に独自の外国ニュース集配制度を生み出した。パリとブリュッセルに通信員を置き、郵便局だけに頼る体制を改めたのである。その結果、タイムズは8月にブラウンシュ・ワイク公の反革命宣言をスクープし、脚光を浴びた。ブリュッセルから土曜日に送られた手紙は、月曜日プリンティングハウスに届き、印刷されたのである。

こうしてタイムズはヨーロッパ大陸からのニュースに力を注いだことによって、外国種の報道では、他紙に追従を許さぬ基礎をこの時期既に、うちたてたのである。

当時の政治報道

当時新聞、言論界は墮落していたが、政界も腐敗していた。というのは、政府高官から秘密に補助金をせしめる手が横行していたり、有名人の評判や名誉を傷つけずにすましたりしてその代償金をせびり取るというような、言論界にとって恥とすべきことが行われていたからである⁵。

ウォルターも同列の人間ではあった。1789年1月に、他の新聞発行人と同様、当時のピット政府（William Pitt the Younger 1783～1801）から、政府、および国王、王室への不利な記事を書かないことを条件に、300ポンドの裏金を受け取っていたのである（表1参照）。

ところが同年の2月にウェールズ皇太子（のちのジョージIV世）、続いて

⁴ 1ギニーは21シリング。当時の新聞記者の報酬は週給5ギニーであった。

⁵ 磯部佑一郎『イギリス新聞史』（ジャパンタイムズ社、1984年）、p.88

6月、ヨーク公を中傷する記事を書き、11月に名誉毀損の罪に問われた。その結果、罰金（£50）と、1789年から91年までの禁固刑を受けた。このウォルター入牢の期間はウィリアム・フィニー⁶が経営を代行した。また、ウォルターは釈放後、ウェールズ皇太子から賠償金250ポンドを受け取っていたから、王室を批判しながらも、まだ完全に新聞が政治や王室から独立していない一面がうかがえる⁷。

ジョン・ウォルター1世は想像力と決断力を兼ね備え、罰金や禁固刑を受けながらも、記事の割り付けや扱い方を変える手法を研究するなど、18世紀末期の新聞業界の開発に新しい息を吹き込んだ人物であった。

表1 小ピットが新聞社に支給した補助金1790～92年

新聞名	金額	創立年	形態
<i>St. James' Evening Chronicle</i>	£200	1761	*夕刊紙
<i>London Evening Post</i>	£200	1727	*夕刊紙
<i>Whitehall Evening Post</i>	£200	1746	*夕刊紙
<i>The Public Ledger</i>	£100	1760	*夕刊紙
<i>The World</i>	£600	1787	日刊紙
<i>The Morning Herald</i>	£600	1780	日刊紙
<i>The Times</i>	£300	1785	日刊紙

*夕刊紙=火、木、土曜日の週3回発行

The History of the Times. Vol.I, 1935. p.23, p.61.

ジョン・ウォルター1世は想像力と決断力を兼ね備え、罰金や禁固刑を受けながらも、記事の割り付けや扱い方を変える手法を研究するなど、18世紀末期の新聞業界の開発に新しい息を吹き込んだ人物であった。

⁶ William Finey ライバル紙でもあったワールド紙の所有者ウェールズ夫人 (Mrs. Wells) の肝いりで、タイムズの経営者の代行をすることとなった。

⁷ Martin Walker. *Powers of the Press*. 1982, p.30.

2. ジョン・ウォルター 2 世 (John Walter II)

1776～1846（在職期間1803～1846）

息子たちが成長すると、ウォルター 1 世は、徐々に経営者として、事業に参加させ始めた。まず、1797年、ジョン・ウォルター 1 世の長男、ウィリアム・ウォルター (William Walter) が経営を継いだ。しかし、彼は文学的な人間で、実務的、ジャーナリスティックな視点には欠けていたため、むしろ次男のウォルター 2 世に期待をかけ、彼がオックスフォード大学のトリニティカレッジを卒業すると、早くから自分の片腕として、仕事を手伝わせていた。

ウォルター 1 世は 2 世の意欲をみてとると、長男のウィリアムを引退させ、1803年、経営をウォルター 2 世に全面的に任せることにした。この時の『タイムズ』は、まだ競争紙『モーニング・ポスト』⁸、『モーニング・クロニクル』⁹の後塵を拝する存在だった。27歳で経営者となったウォルター 2 世は、「親の七光り」と思われるのがいやで、自分の考えをはっきりと打ち出す姿勢をとっていった。その考えは、父ウォルター 1 世が、あくまでも「印刷会社」という立場でタイムズ経営を固執するのに対して、タイムズという新聞社の発展を願う、というものであり、そこに明確な考えの相違が見られた。

⁸ *The Morning Post* 1727年、“戦う牧師 (the fighting person)”の異名をとるヘンリー・ビュート (Henry Butte) が創刊。1781年からはダニエル・スチュアート (Daniel Stuart) に経営が移った。新聞の内容は、政治種ばかりでなく、外国ニュースも載せ、美術、演劇批評、殺人事件、クリケットの試合の結果などの記事をその特色とした。また、スタンプ税や広告税にもかかわらず、新聞が利益のある企業となり、自立できるようになった初期の新聞社である。これは、ダニエルの鋭い企業感覚のおかげであり、彼は新聞と広告の深い関係に開眼したジャーナリストであった。つまり、広告が発行部数を増やし、経済的、政治的独立を助けると共に、読者を楽しませ、関心を集めるものであることをみてとった、最初のイギリス人ジャーナリストであった。そのおかげで、同紙の発行部数も350部から1803年には4,500部と上昇した。のち、*The Daily Telegraph* と合併。

⁹ *The Morning Chronicle* 1769年 William Woodfall により創刊。迅速かつ正確な議会報道で、名声を博した最初の新聞だった。この発行人ウッドフォールは別名“メモリー・ウッドフォール”と言われたほど、優れた記憶力をもっていた。彼は議会の傍聴席に姿を表わし、目を閉じて国会議員の演説をノートもとらずに聞き、急いで帰宅し、すばやく、議会記事にまとめたというのである。1789年、James Perry が買収。彼は、議会に数人の記者を派遣して、リレー式に詳細な記事を草稿させるなど、新聞報道の新しい手法を考え出し、新聞経営にあたり、クロニクル更生に功績があった。また新聞の寄稿家に、多くの文人を集めたことでも話題になった。

これは、大成功をおさめた父へのプレッシャーをはねのけるための、必死のものがきから生まれたのだろう。



父と違うタイムズの発展を願う彼は、政府から離れ、中立・独立紙を目指した。まず、初めに、それまでの政府からの補助金、政党基金の交付を断ち、言論の独立性を保とうとしたのである。そのためには、どうしても経済的な独立が必要であった。ウォルター2世の願うタイムズの独立を可能にしたのは、皮肉にも父が恩恵と被ったところの印刷技術の革新であった。

印刷技術の革命

1814年11月29日付けのタイムズは、蒸気機関で印刷された世界最初の新聞となった。大げさにいわずとも、それは新聞、そして印刷の産業革命であった。ウォルター2世は、この成功を喜び、自ら初版を監督し、「我が社は、新技術により、毎時1,100枚の印刷が可能になり……」¹⁰と自信満々で発表したのである。

それまでは、24人のプレスマン（当時の印刷工、ハンドプレスの職人のことをこう呼んでいた）が12時間かけて、ようやく6,000枚の新聞を刷っている状態であった。印刷機そのものは鉄製であったが、長い棒を人間が引っ張って手刷りする手引き印刷機であった。

これに対し、社屋に新設されたシリンダ印刷機（図1）は、1時間1,100枚の印刷が可能だった（それ以前は、1時間約300枚）。それまでの産業革命の経過—たとえば、労働者による機械の破壊、工場襲撃などの反機械暴動を恐れたウォルターは秘密にこの計画を進めた。失業を心配しているプレスマンには、今までどおり賃金を払うと約束していた。こうして、無事に1814年以降この機械が使われ始めたタイムズは当時発行部数増加の機運もあって、発売部数激増の盛況期をもたらしてくれたのである。

¹⁰ 馬渡 明『印刷発明物語』（日本印刷技術協会、1981年）、p.173

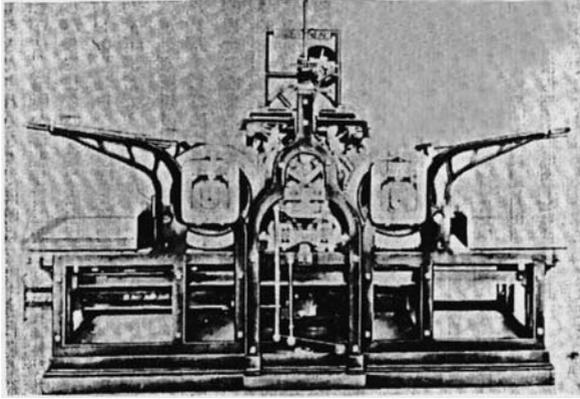


図1 馬渡明『印刷発明物語』（1981年）、p.173

タイムズの印刷革命の効果は極めて明らかであった。何故なら、グーテンベルグ以来の300年余りというもの、2枚の板で版に紙を押しつける手引き機械を使っていた状況が一変したからである。さらに、前述のとおり、1時間あたり300枚の印刷から、1,000枚の印刷が可能になったわけであるから、印刷時間は3分の1近くに短縮された。

当時のタイムズの発行部数は3,000～4,000部だったが、新しい印刷機の導入によりわずか3時間で同じ部数を印刷できるようになった。遅く印刷にとりかかっても、早く印刷が終わる。つまり、ほかの条件が同じであれば、印刷時間の短縮は、ニュースの締め切り時間を遅らせることができ、結果として他のライバル紙を圧倒することができるようになったのだ。その上、印刷の単価も25%安くできた。

タイムズの発行部数は翌年に5,000部、6年後の1820年にはみごと1万部の大台に乗った。さらに先になるが、父から引き継いだ4頁建てのタイムズは、1829年には合計48段を持つ、12ページ建ての新聞となるほどの飛躍を遂

¹¹ Friedrich König (1744～1835) ドイツ中部生まれ。大学で機械学を修め、ライプチヒの印刷工場に勤め、約1年で活版印刷をマスター。その後、印刷機の機械化を目指し1806年発明の権利を保証してくれる特許法のしかれているイギリスへ渡った。1810年プラテンプレス（平圧式印刷機）の蒸気機関での特許を得た。これは自動インキつけローラを備えた蒸気駆動と手動を兼ねた印刷機であった。その後、平らな圧盤のかわりに円筒状の圧胴を持つ印刷機を作り、1814年画期的な成功を修めた。

げた。それもこれも、この印刷機の成功のおかげである。

印刷機の開発に成功したのは、フリードリッヒ・ケーニッヒ¹²と、アンドレアス・バウアー¹²という2人のドイツ人であった。そして彼らが開発したのは、二本のシリンダをもつダブルプレスで、1台の機械の両側から紙を差すために、そう呼ばれた。

同機を採用するにあたって、ウォルターの先見の明が発揮された。というのは、当時の競争紙『モーニング・クロニクル』にも、ケーニッヒから使ってもらえないかという申し出があったものの、クロニクル側はとるに足りないものとして採用しなかったのである。この機械の導入により、タイムズは明らかに成長のターニングポイントを迎えたとも言えよう。さらに1828年、ウォルター2世はオーガスタス・アプルガス（Augustus Applegarth, 1788～1871）とエドワード・クーパー（Edward Cowper, 1790～1852）が開発した四本シリンダ式の印刷機を導入、1時間4,000枚の印刷ができるようになった。

こうして、タイムズの発行部数が増え、経営が忙しくなると、ウォルター2世は、自ら編集するのをやめて、経営に専念することにした。言わば編集権と、所有権が全く独立した形で活躍した彼の時代は、今日でも、イギリス言論界においての新聞の在り方の理想の形のひとつになっている。そしてこの時、初代主筆として任命されたのが、ジョン・ストッダートとトーマス・バーンズだった。

J.ストッダート、T.バーンズ主筆

ジョン・ストッダート（John Stoddart, 1773～1856）は、オクスフォード大学卒業後、1812年からタイムズの初代主筆として在職。フランス革命に反対し、攻撃的な筆で、ついにはナポレオン（Napoleon Bonaparte, 1769～1821）を激昂させ、彼に名誉毀損まで考えさせた、と言われた新聞人である¹³。のちに、ナポレオンは、セント・ヘレナ島へ流される途中に立ち寄り

¹² Andreas Friedrich Bauer 1783～1860) ドイツ生まれ。機械技師であり、ケーニッヒと共に、印刷機械開発に力を注いだ。ケーニッヒの「アイディア」にバウアーの「指導」が奏功し成功を見る。のちにケーニッヒと共に、ケーニッヒ・ウント・バウアーという世界最古の有数な印刷機製造会社を創立した。

¹³ 磯部佑一郎、前掲書、p.80

たイギリスの港でわざわざタイムズを取り寄せたという逸話が残る。



しかし、ストッダートのこの攻撃的な筆が、逆にタイムズでの彼の地位を危うくし、ついには1816年、わずか5年で主筆の座を去らなければならなくなるという不幸な結果をもたらした。何が禍となるかわからない。

ストッダートの後任として、1817年タイムズ二代目主筆に任じられたのは、トーマス・バーズ(Thomas Barnes, 1785~1821)であった。彼は、ケンブリッジ大学卒業後、1807年にタイムズに入社。はじめは、演劇批評や議会報道を担当していた。

その間攻撃的な主筆ストッダートと口論していくうちに、彼の信条が芽生え始める。すなわち、「新聞は世論を重視すべきである」ということである。これは、タイムズを公共のものにするという基本に立って、「世論こそ新聞が頭を下げる唯一の権威者である」と考えたからだった。例えば、1820年のカロライン王妃離婚訴訟事件¹⁴では、イギリスの大衆感情が王妃に同情的であるとみると、治安維持法に触れる寸前のところで、国政を批判。この王妃支持キャンペーンを契機に、一時的に販売部数が7,000部から15,000部へと2倍に跳ね上がったこともあった。

このようにして、バーズが意図したのは、タイムズは特定の個人や政党や政府の代弁者として存在するのではなく、世論の声によって作られる国民本位の新聞とすることであった。しかしそれはあまりにも公衆の関心を重視し、慎重に世論を打診するので、「寝返り(The Turnabout)」と皮肉なニックネームをつけられることもあった。

この世論の動向をいち早くつかむためには、国内取材体制の整備も必要であった。当時はまだ国内に鉄道が敷かれておらず(1825年、スタクトンとダーリントン=いずれもイングランド・ダーラム州=開通が最初)、ニュース伝

¹⁴ 国王ジョージ4世は、莫大な借金の肩がわりの条件として結婚したカロライン王妃とはどうしても性格が合わず、離婚しようとして、特別法案を議会に提出したが、上院は三読会で9票の多数というところまでこぎつけたが、下院の形勢があやしくなり、法案をひっこめた。この時ロンドン市中では、王妃のために、三晩イルミネーションをやったというほど彼女は人気であった。1821カロライン王妃の死去によって、この問題は解決した。

鈴木 雄雅

達は、馬に頼っていた。1830年代になると、道路が改善され、サラブレッド馬の馬車便によって以前より時間が短縮された。また、馬をリレー式に使って、ニュース速報戦が行われ始めており、早便の新聞には「速達便 (By Express)」の文字が大きく飾られた。

表2 平均旅行時間の変化

	距離	1750年	1830年
ロンドン — ニューカッスル	380km	6日	1日強
ロンドン — エジンバラ	520km	10日	2日
ロンドン — プライトン	75km	1日	5.5時間

R. ケーツ『世界の歴史教科書シリーズ イギリスⅣ』(帝国書院、1981、p.91)より。

他紙を出し抜くことを念頭においていたタイムズは、さらに、馬車のリレーでつなぐ方法を考え出し、「特別速達便 (Extraordinary Express)」と銘打ち、他紙を圧倒した。1834年には、エジンバラから、四輪馬車の中継でグレー伯爵の演説を独占スクープしている¹⁵。

外国通信の確立

しかしながら、ニュースの速報戦は、国内報道よりも、むしろ外国ニュースの報道合戦が激しかった。イギリスでは、産業革命が進行し、特に繊維紡績製造機で機械化が進み、重要な輸出産業となっていた。一方、19世紀初めのヨーロッパ大陸では、ナポレオンが皇帝となり (1804年)、神聖ローマ帝国を崩壊させ (1806年)、大陸封鎖令を出したりと (1806年)、外国ニュースが大量にかつ必要とされる時代を迎えていた。こうしたヨーロッパ大陸の政策がイギリスの産業に大きな影響を与えるために、必然的に政治、経済、社会の分野を問わず誰もが大陸からの情報収集に目を向け始めたのである。

そこで、タイムズは外国ニュースに力を注ぐために、まず、外国特派員制度を設けている。のちに有名になる戦争特派員よりもずっと以前のことである。1807年、H.C.ロビンソン (Henry Crabb Robinson, 1775~1867) をプ

¹⁵ Earl Charles Grey (1764~1845) ホイッグ党の政治家。1830~34年英国首相。

ロイセン・ホルスタインのアルトナ(Altona)へ派遣し、ティルジット条約¹⁶の詳細を送らせている。1809年のオランダ攻撃の時、フラッシング陥落の報はロビンソンによって、外務省が情報を入手する24時間前に情報を仕入れ、スクープしている。タイムズは特別仕立てのクーリエ(courier)¹⁷やボートを使って、イギリス海峡を越えた大陸のニュースの収集に力を入れたのである。ナポレオン戦争(1803~1815)の頃は密輸船と契約し、ニュースの入手で他社を圧倒していた。この情報量の多さが、初代主筆ストッダートのナポレオン攻撃の筆に色を添えたのだろう。

また、中近東諸国のニュース伝達のスピード化を計るために、フランスのマルセイユにクーリエを待機させて、スエズから来る郵便船を迎え、ニュースや情報の包みを受け取るやいなや、クーリエは陸路パリへ向かい、パリからこれをフランス西海岸へ運び、小型船で対岸のドーバーへ運ぶ方法も生み出した。

ところで、当時もまだ外国ニュースはウォルター1世の時代と同じように、まだ郵便局が幅をきかせていた時代である。そのために、郵便局の遅配などで邪魔されることもしばしばあったという。タイムズはこれに対して、ロンドンの商社あてに書簡や通信を送らせ、そこから記事を受け取り、郵便局の妨害に対抗していた。

タイムズがフランス政策を槍玉にあげて論を展開している頃(1840年代)は、クーリエでフランス国内を通過する時、官憲が尋問したり、書類を調べなど、早便への邪魔がなされたりもした。

タイムズ社からの政府、郵便局への再三の抗議も請願も効果がなかった。そのために、考えられるあらゆる手段をつくして、タイムズは外国ニュースの獲得に努めたわけである。

ウォルター2世の時代、タイムズは産業革命で成長した中産階級を中心とした人々の主張を代弁し、内外通信網を拡充していった。こうして、権威を

¹⁶ Peace of Tilsit 1807年7月フランス、ロシア、プロイセンの間で調印された講和条約。ロシアのツァーがもしイギリスがナポレオンの調停を受けない時は、大陸封鎖を約束していた。こうしてナポレオンは全ヨーロッパの支配者として権力の絶頂にたった。

¹⁷ 外交使節と本国政府の間の信書を伝達するための特別使者。接受国では、館員同様の特権が与えられ、第三国では無害通航権を認められる。外交使節と本国政府の間の信書を伝達するための特別使者。接受国では、館員同様の特権が与えられ、第三国では無害通航権を認められる。

鈴木 雄雅

高め、発行部数を増やし、他紙の追随を許さぬ地位を築き、「ザ・サンダーラー (The Thunderer)」の異名を取るほどに、ウォルター 2 世はバーンズと共に、タイムズを成長させたのである。

結 び

200年以上の歴史をもち、ロイター通信社とともに、大英帝国、パックスブリタニカを代表するメディアとして君臨してきたタイムズ。ルパート・マードックの傘下に入ってからの評判は芳しくない。経営者が替わればメディアも変わる—まさにそのとおりだが、逆に経営と編集を分離独立することによって、長きにわたり成長路線を打ち立てたのもタイムズであった。

タイムズを創刊したジョン・ウォルター 1 世自身「社会のためになる」「木鐸である新聞にしよう」などという意識はなかったのは明らかである。借金返済をいかにして効率よく成し遂げることができるかという命題から、新事業として新聞の発刊を試みたのである。当時、多くの者たちがこのベンチャービジネスに参入しようとしたが、彼らとウォルターの違いは、その差の程度はあるにしても、時代の流れにより敏感だったのがウォルター 1 世であったと言える。続くウォルター 2 世は、外国ニュースの収集、配信に力をいれる。もちろん卓越した編集者、そしてジャーナリズムの成長期に彼らがいたことも事実である。

風向きはタイムズに追い風だった。

(参考文献は次回に一括して掲載します)

John Walter I/John Walter II/Thomas Barns の顔写真は

Spartacus Educational (<http://www.spartacus.schoolnet.co.uk/>) および英国ポートルート博物館 (<http://www.npg.org.uk>) から